

ある自閉症スペクトラム障害者におけるユーモア表出の特徴

—— ユーモア表出時の他者理解の様子から ——

永瀬 開・田中 真理

東北大学大学院教育学研究科

要約

本稿では、他者との関係を築くことに困難さを抱える自閉症スペクトラム障害者の A が行った社会的な場面におけるユーモア表出の特徴について、A が参加している発達障害者を対象としたグループワークの観察から検討を行った。検討の結果、A のユーモア表出の特徴として、他者の知識状態や他者にとっての無意味性を考慮せずにユーモアを表出することによって、他者との関係が円滑に進まない様子が観察された。A のこうしたユーモア表出の背景には、他者の心的状態の理解の難しさや、衝動性の高さなどがあると考えられた。今後は、A のユーモア表出を他者がどのように受け止めたかをフィードバックしながら、A の衝動性の高さについても本人にフィードバックしていく必要があるだろう。

キーワード：自閉症スペクトラム障害 ユーモア表出 他者理解

I. 自閉症スペクトラム障害者におけるユーモアの特徴と他者理解との関連について

対人的相互交渉の質的障害、コミュニケーションの質的障害、想像力の障害および反復した常同的動作を特徴とする自閉症スペクトラム障害 (Autism Spectrum Disorders: 以下 ASD) 者は、他者との関係をうまく構築できないことが指摘され (Wing, 1996)、そのことによって、不登校などの不適応状態に至ることが指摘されている (渡邊・佐藤・山本・熊代, 2010)。そのため ASD 者が対人関係への支援は、ASD 者が日常を適応的に送るためにも重要だと考えられる。

ASD 者の対人関係を考える視点の一つとして、ユーモアが挙げられる。ユーモアは刺激をきっかけに生起する愉悦 (mirth) や愉快さ (exhilaration) と定義され (Nomura & Maruno, 2011)、Fraley & Aron (2004) は対人関係において大きな役割を果たすことを指摘し、ユーモアを他者と共有することが、2 者間の親密度を高めることを明らかにしている。その一方で、Kowalski (2000) は、他者に自身がユーモアを感じる事柄や冗談を他者に伝えること (以下、ユーモア表出) には、ユーモア表出の内容によって、他者に不快な感情を与える場合があることを明らかにした。すなわちユーモアには他者と関係を築くにあたって、ポジティブな効果とネガティブな効果の 2 つがあることがわかる。三橋 (2010) は、ASD 者におけるユーモアと対人関係の関連について、他者とユーモアを共有できないがゆえに、孤立感を抱いている ASD 者が存在することを指摘している。そのため、ASD

者は、ユーモアの持つポジティブな効果が発揮できていないということが考えられる。

ASD 者のユーモアについて、ユーモアを感じる刺激に特異性があるということが指摘されている (Lyons & Fitzgerald, 2004)。その特異性の内実について、Reddy, Williams & Vaughan (2002) は、ASD 児 (3-5.5 歳) 19 名の親と Down 症児 (1.6-5.5 歳) 16 名の親を対象に、子どもが日常生活でユーモアを体験した出来事についてインタビューを行ったところ、ASD 児が Down 症児に比べて、便座に頭を乗せることなど、社会的に不適切な行動に対して、ユーモアを感じない一方、養育者にとってユーモアが感じられない状況で、ASD 児が Down 症児に比べて多くユーモアを感じていることを明らかにしている。また Samson & Hegenloh (2010) は、ASD 者 19 名 (平均年齢 27.79 歳) と定型発達者 109 名 (平均年齢 24.99 歳) について、1 コマのセリフのない漫画を見た後の感想を比較したところ、ASD 者が定型発達者に比べて刺激における他者の心情について言及しないことを指摘している。このことから、ASD 者はユーモアを感じる時に、ユーモアを感じる対象となっている人物の心情を想像しないことが考えられる。このように、ユーモアをいかに捉えるかという理解の側面に関する研究は蓄積されている。これらの知見の蓄積は、ASD 者と関係を築く上で、ASD 者がユーモアを感じやすい話題を話すといった対人関係の支援につながると考えられる。

しかしながら、ASD 者のユーモアの出の側面を扱った研究については、ほとんど研究が蓄積されておらず、次に示す研究報告に散見される程度である。Van Bourgondien & Mesibov (1987) は、青年期の ASD 者 (Age : 18-37 歳, FIQ : 71-101) を対象としたグループ活動中のジョークタイムで見られた、ユーモア表出を、「対象に対する不適合行為」「対象に対する不適合なラベリング」「概念的不適合性」「意味多重性」の 4 つに分類し、その結果「概念的不適合性」に該当するユーモア表出を多く行ったことを明らかにしている。また Werth, Perskin & Boucher (2001) は、高機能 ASD 者の女性 1 名 (29 歳) が母親に送った手紙やビデオの中で、高機能 ASD 者の女性 1 名 (29 歳) が母親に送った手紙やビデオの中で、自分の興味のある雷や戦争と関連した”going thunderground”や”Winston Churchipoos”といった自身の思いついた新奇な言葉などのユーモア表出を行っていることを明らかにした。

これら先行研究から、ASD 者はユーモア表出を行う能力があること、ASD 者がユーモア「概念的不適合性」の形式を表出しやすいことが明らかになったといえるだろう。しかしながら、ユーモアを他者と共有するという視点からユーモア表出について考えると、ユーモアを共有することによる効果が発揮されるためには、ASD 者が行ったユーモア表出が受けとる他者にとってもユーモアを感じることができるものでなければならない。そのためユーモア表出を行う際には、「事柄や冗談に対してユーモアを感じる」というだけではなく、「自分がユーモアを感じる事柄や冗談が他者にとってもユーモアを感じるものなのかどうかを判断する」という他者理解が求められる。ASD 者の特性として、他者への

志向性の希薄さが指摘されていること (Klin, Jones, Schultz, Volkmar & Cohen, 2002)、他者の心的状態の理解に特異性を示すこと (Baron-Cohen, Leslie & Frith, 1985) を考えると、ASD 者がユーモアを感じて表出した事柄や冗談が、他者にとってはユーモアを感じられない場合があると考えられる。そこで本稿では、ユーモア表出に高い動機付けがありながら、そこで行ったユーモア表出が他者にどう映るかが感じられないことが頻繁に見られる 1 事例について、そのユーモア表出の内容と他者理解という視点から検討することとする。

II. ユーモア表出時の他者理解において特徴的な様子を示した事例 A

事例 A は、自閉性障害の診断名を受けた公立中学校の 2 年生の女子生徒 (FIQ : 91、VIQ : 92、PIQ : 92、WISC-IIIによる) である。事例 A が参加したグループは、小集団におけるかかわりの中で他者への志向性を高めたいという主訴を持って集まった発達障害者 10 名を参加者としてグループが形成された。ここでは、グループワークの中で見られた A の特徴的なユーモア表出のエピソードを a から f の 6 つ報告する。エピソード中の「」は A や他のグループメンバーの発言、<>はスタッフの発言を表している。

a : お笑いのなぞかけや、だじゃれをメンバーが各自で考え披露する活動を行った。この活動では、ネタの面白さを「大笑い」「中笑い」「小笑い」の 3 つで評定する判定者を 1 名のスタッフが務めた。司会役のスタッフが複数の意味のある言葉を組み合わせて、面白い文章を作るようグループのメンバーに伝えた後、お題が「うみ」という言葉であることを伝えた。A は司会役のスタッフが活動の内容を伝えている時から、笑顔を浮かべており、活動への動機付けの高さがうかがわれる。A はなぞかけを書き込むスケッチブックを配られると即座に書き込み、「整いました！」と司会役のスタッフに何度も伝える。「海にあるものとかけて、あごにあるものと解く、その心はオオヒゲマワリ」とスケッチブックに書いて発表する。それを聞いた他のメンバーやスタッフは、意味が分からなそうに首をかしげる様子や、スケッチブックに書かれている A の文字を読んだりする様子を見せ、誰も笑いの表情を浮かべないでいると、A は「オオヒゲマワリ」と大きな声で意味がかぶっている部分をメンバーに伝えるが、その伝え方は、言葉を区切る、などの他者にわかりやすく伝える工夫がされたものではなかった。A はその後「オオヒゲマワリの意味分かりますか？」と全体に聞く。司会役のスタッフがくわかった。オオヒゲマワリの髭っていうのと、オオヒゲマワリっていう何か海藻があるんだよね？海藻だっけ？>と言い、A はスタッフが「ああ、そうなんだ？」と尋ねると、A は「海藻かなんか。」と答える。このやりとりの後、判定者のスタッフが「大笑い」の判定をし、<なんか高度だった。海藻と…>と判定の理由を A に伝えようとするが、A はその理由を聞き終わる前に、「次のネタ行きます。」と次のネタを発表しようとする。

この場面では、早くなぞかけを披露したいというユーモア表出への強い動機づけがありながら、ほかのメンバーが知らない「オオヒゲマワリ」という単語をユーモア表出に用い、ネタを説明する際も、言葉の区切り方を変えるなど、他者にわかりやすいようにネタを伝える工夫を行っていない様子がかがわれる。その一方で、ネタを披露した後、他のメンバーに「オオヒゲマワリの意味わかりますか？」と尋ねるなど、ユーモア表出後の他者の様子に注目している様子も見られた。

b: 以前途中まで作っていたロボットの模型を完成させる活動と次回の活動を考える活動を行った。このロボットの模型を作るという活動は、グループの他のメンバーが提案した活動であった。Aはこのセッションで久しぶりに活動に参加しており、活動の最初の方から、「じゃあ次は、お笑いサミットで。」と自分のやりたいお笑いの活動を提案したいという気持ちが活動に参加する強い動機付けになっているということがうかがわれた。司会役のスタッフが「今日はこの後で、この部屋を使いたいっていう人たちがいるから、時間通りに終わりたいと思います。」とグループのメンバー全体に伝えると、Aは「じゃあ早くロボット模型作ろう！あるいは壊そう！」笑って冗談を言う。それを聞いたメンバーの何人かは笑ったが、あるメンバーが「最悪だ〜」と発言する。スタッフが「Aのそのボケは笑えないよ」とAのユーモア表出が面白くない人もいたことを伝えると、Aは「今笑ってたよ」とスタッフに伝える。それを聞いたスタッフが「いや僕は笑っていなかったよ」と答えると、Aは「どこが(面白くなかったの)！？」とやや怒り気味に話す。司会役のスタッフが「え〜壊すの〜って思った。」A「じゃあ、ロボット模型を作るのではなく、壊すのではなく…」と悩んだ後に、考えるのをあきらめた様子で、仰向けになり寝転がる。

この場面では、あるメンバーが作りたいといったロボットの模型を壊すという内容の、他のメンバーが傷つくようなユーモア表出を行っている。またこの場面での他者理解の特徴として、スタッフが面白くなかったことを伝えた際に、どこが面白くなかったかを気にする質問を行ったように、他者がユーモアを感じているかどうかを気にしている一方で、どのような内容であれば他者が傷つかないのかということに関しては、わからない様子も示していた。

c: メンバーの写真が印刷されたトランプを使って大富豪を行う活動を行った。この大富豪の活動は、その前のセッションで他のメンバー(Bとする)から提案された活動である。Aは自分の写真が12のカードに印刷されていることについて、「なんで俺、クイーンなの？俺男だよ？」と話す。それを聞いたスタッフが「クイーンって大富豪だとかなり強いカードだよ。」と伝えると、Aは「それだったら、ジョーカーかエースあたりにしてもらわないと。」と答える。スタッフは、「だってジョーカーは、ねえ」と言いながらBの写真が印刷されたジョーカーのトランプをAの前に出す。すると、AはBの顔の近くを指さしながら、「顔だからね。」と笑って発言する。すると、Bはそれまで

笑っていたが、Aの冗談を聞いて以降、怒った表情になり「あ？」とAの方をにらむ。Aは笑顔のまま続けて、「顔だからね～。顔がジョーカーっぼいんでしょ。」とBに話す。Bは「チ！ふざけんじゃねえぞ！くっそ野郎！」と舌打ちして怒る。すると、AはBの膝のあたりを強く叩く。スタッフがBに「<どうして怒ったの？>と質問すると、Bは「顔のこと言われたから…」と答える。Aはそれを聞いた後も「顔がジョーカーに似てたからなんでしょ。」と言い、続けて「じゃあ、この話はやめにしよう。」と発言する。それに対してスタッフは「く～ん。言われたBはどうだろうね？」とAに問いかける。Aの表情からは笑顔がなくなるが、Aは「でも顔で決められたんだからいいじゃないか。」と続けて話す。スタッフは「(カードの)強さで決めただよ。」と伝える。

この場面でも、ほかのメンバーの顔がジョーカーに似ているというBを傷つける内容のユーモア表出を行っていた。そしてこの場面における他者理解の特徴として、一度Aがユーモア表出を行った後に、Bの表情が硬くなり、「あ？」とイライラしている様子を見せたにもかかわらず、AはBの様子に注目せず、また同じ内容のユーモア表出を行ってしまっている。この場面では、ユーモア表出を行った後の他者の反応や様子に注目をしていないことがうかがわれた。

d: メンバーの前で用意された道具を普段とは違う使い方を披露して笑わせるモノボケの活動を行った。この活動でも、ネタの面白さを「大笑い」「中笑い」「小笑い」の3つで評定する判定者を2名のスタッフが務めた。スタッフは用意された道具を示しながら、用意した道具を使って面白いことをすることと、その道具の正しくない使い方をすると面白いということをメンバーに伝える。モノボケを考える時間にスタッフが「Aはもう思いついたの？」と尋ねると、Aは「はい。」と答える。他のメンバーもモノボケを思いついたところで、司会役のスタッフが「<では思いついた人どうぞ！>と伝えると、Aは一番最初に「はい。」と手を挙げる。司会役のスタッフがAを最初の発表者に指名すると、Aはぬいぐるみを2つ持ち、判定者のうちの1人である女性スタッフの胸に当て、「新型のブラジャー、新発売！！1000円。」と発言する。司会役のスタッフが「判定者に判定をしてもらいます。」>と言い、太鼓を当てられた女性スタッフが、「小笑い」の判定をし、もう一人の判定者のスタッフは「大笑い」の判定を行った。<超恥ずかしかった！ここ（胸に手を当てて）に触られたのかと思って。やめてって言いたくなった。>と伝えるが、Aは笑いながら「でも〇〇（コメディアンの名前）ならそういうことするよ。」話す。女性スタッフは「でも、〇〇じゃないもん。Aは」と話す。

この場面では、女性スタッフの胸にぬいぐるみを当て、「新型のブラジャー、新発売！！1000円。」という社会的に受け入れがたい過度に性的な内容のユーモア表出を行っていた。ここでの他者理解の特徴として、女性スタッフが恥ずかしさを伝えた際、「〇〇がやっていたから、自分がやっても面白い」といった、過度に一般化した他者理解を行っている様子がうかがわれた。

e: 写真に写っている物の名前を別の名前に変えてメンバーを笑わせる活動を行った。この活動でも、ネタの面白さを「大笑い」「中笑い」「小笑い」の3つで評定する判定者を2名のスタッフが務めた。司会役のスタッフがこの写真を見て面白いタイトルをつけることと、タイトルを考える際に、何に見えるかを想像して考えることをグループのメンバーに伝える。その後考える時間を設定すると、Aはすらすら書き終える。発表の時、Aは緑茶の写真を「カエルの小便」と発表する。Aのこのネタに対して、2人の判定者のうち、1人は「大笑い」と評定し、もう一人のスタッフはくちよっと笑えないな〜>と言いながら、「小笑い」の判定をする。「小笑い」の判定をしたスタッフがくなんで「小笑い」だったでしょう?>とAに質問をすると、Aは「汚いものが嫌い」と答える。その発言を聞いてスタッフは「そうなのです。これは聞く人にとってはちょっと「大笑い」には行かないかな。」とAに伝える。

この場面では、小便という社会的に受け入れられないがたい内容のユーモア表出を行った。しかしながら、判定者のスタッフがユーモアを感じなかった理由をAに尋ねた際には、「汚いものが嫌い」と理解をしている様子を見せており、自分がユーモアを感じる内容と他者がユーモアを感じる内容が異なることを理解し始めていることがうかがわれた。

Ⅲ. Aのユーモア表出における他者理解の特徴とその背景

人がユーモアを感じる際には、刺激に含まれる構造的不適合と刺激内容の無意味性を評価する必要があるということが指摘されている(伊藤, 2009)。構造的な不適合とは、刺激を構成する要素の組み合わせと一般的な知識や常識との乖離(例: 雪山の中にもかかわらずサメが泳いでいるなど)や因果的なつながりとズレ(例: 友達が休み時間にサッカーをすると話していたにもかかわらず、サッカーではなく野球をしている)だと定義されている(伊藤, 2009)。一方無意味性とは、刺激の内容が個人的・社会的に重要な価値や意味を持たないこと(例: 個人の劣等感を扱った内容でない冗談や過度に攻撃的・性的な内容でない冗談)である(伊藤, 2009)。すなわち他者に向けてユーモア表出を行う場合、①刺激を構成する組み合わせや因果的なつながりと他者にとっての一般的な知識や常識と乖離しているかどうかと、②他者にとって刺激内容が重要な価値や意味を持たないかどうかを理解することが必要である。これらの知見から、上述したAのユーモアエピソードについて考察を行う。

Aが海藻のオオヒゲマワリと髭をなぞかけとして発表したaのエピソードからは、Aがオオヒゲマワリと髭の異なる組み合わせにユーモアを感じ、表出している一方で、①における他者にとっての一般的な知識や常識について、「グループのメンバーが海藻のオオヒゲマワリを知らないということ」を考慮している様子が見られなかった。このことから、Aは他者の知識状態を理解しながらユーモア表出を行うことに困難さを持つことが考えられる。

また、グループ活動で作成するロボット模型を壊そうという内容の冗談を表出する、活動で使用するジョーカーのトランプに印刷されたメンバーの顔写真を見て、B に対して「顔がジョーカーっぽい」という内容の冗談を表出した b と c のエピソードから、A がユーモア表出時に、その内容が他者を傷つけるものかどうかという判断をしていないことが考えられる。そして、ブラジャーや小便といった内容のユーモア表出を行った d と e のエピソードからは、A がユーモア表出時に、過激な性的な内容、排泄物などの社会的にタブーとされている内容を考慮しないということが考えられる。伊藤（2009）は、刺激の内容が自分の劣等感など自分を傷つける事柄に関係する場合や、刺激の内容が自分の所属する社会集団にとって有害であったり、社会的規範から逸脱する場合には、無意味性が評価されないことを指摘しており、A にとっては、ユーモア表出時に他者にとっての無意味性を考慮することが難しいということが考えられる。

A がこのようにユーモア表出時に他者の知識状態や無意味性について考慮しない背景としては以下の 2 点が考えられる。1 つめは他者理解の難しさが挙げられる。b のエピソードでは、「どこが面白くなかったの？」とスタッフに尋ねるなど、なぜその冗談が面白くなかったかを尋ねる様子が見られた。このことは、笑っている様子などの他者がユーモアを感じたかどうか注目する一方で、ユーモア表出のどういった内容がユーモアを感じさせなかったのかといった、他者がユーモアを感じる内容について考えることにむずかしさを抱えていると考えられる。しかしながら、a のエピソードで「オオヒゲマワリの意味分かりますか？」と尋ねや、f で「汚いものが嫌い」とスタッフにとってユーモアを感じられなかった理由について推測し、発言する様子が見られるなど、刺激の内容が他者にとってユーモアを感じられるものかどうか他者の立場に立って考える様子も見られるようにもなっている。

他者理解の難しさ以外の 2 つめの理由として、A の衝動性の抑制の難しさが挙げられる。滝吉・李・斎藤・横田・田中（2010）は、A が実際の対人場面において、衝動性の高さから、他者への配慮にかけず発言をしてしまうことを指摘している。e のエピソードで判定者のスタッフが、汚いものが嫌いであるということを理解しているにもかかわらず、小便といった内容のユーモア表出を行ってしまう背景には、他者がユーモアを感じるかどうかを考える前に、自分が考えたユーモア表出を早く言いたいという気持ちが行動に表れているものだと考えられる。

IV. ユーモア表出における他者理解を促す今後の支援について

以上のように、A はユーモア表出を行う際に、他者の知識状態や他者にとっての無意味性を考慮することに難しさがあり、その背景には、他者理解の困難さや衝動性の高さがあることが推察された。このようなユーモア表出の特性を示す A に対しては、A が他者の知らない内容のユーモア表出や他者にとって無意味性を評価できない内容のユーモア表出

を行ったときに、「その冗談の意味が分からない」「そんな冗談言われると傷つくよ」など、Aが行ったユーモア表出が他者にどのように感じられたかをフィードバックしていくことが必要である。本稿で取り上げたエピソードにおいても、cのくうへん。言われたBはどうだろうね？>や、eのくなんで小笑いだったでしょう？>といった言われた方の気持ちを考えさせるフィードバックや、dのく超恥ずかしかった！ここ（胸に手を当てて）に触られたのかと思って。やめてって言いたくなかった。>といった言われた方がどのように感じたかを伝えるフィードバックを行っている。その結果Aもeのエピソードにおいて、「汚いものが嫌い」とスタッフがどのように感じたかを推測し、aのエピソードにおいて、「オオヒゲマワリの意味が分かりますか？」と自発的にメンバーに尋ねるなど、ユーモアを表出において他者の知識状態や無意味性に対する理解が深まっている様子が見られている。また関わる際には、スタッフ全員がAのユーモア表出に対してネガティブなフィードバックを行うのではなく、何人かのスタッフが、Aの冗談をポジティブに捉えたフィードバックを行い、ユーモアを感じる冗談が人それぞれであることを伝えると同時に、Aの受容感を低下させないように工夫する関わりも重要である。そして関わる際には、Aの衝動性の高さを踏まえると、Aが落ち着いた状態にある時に、自分がユーモア表出をすぐに行ってしまうことに焦点を当てたフィードバックを行い、自身の衝動性の高さについての理解を促すことも重要である。

引用文献

- Fraley, B. and Aron, A. (2004). The Effect a Shared Humorous Experience on Closeness in Initial Encounters. *Personal Relationship*, 11, 61-78.
- 伊藤大幸 (2009). 感情現象としてのユーモアの生起過程 —統合的モデルの提案—. 心理学評論, 52, 4, 469-487.
- Klin, A., Jones, A., Schultz, R., Volkmar, F. and Cohen, D. (2002). Visual Fixation Patterns During Viewing of naturalistic Social Situations as Predictors of Social Competence in Individuals With Autism. *Archives General Psychiatry*, 59, 9, 809-816.
- Kowalski, R. M. (2000). "I was Only Kidding!" : Victims and Perperators' Perceptions of Teasing, *Personality and Social Psychology Bulletin*, 26, 231-241.
- Lyons, V. and Fitzgerald, M. (2004). Humor in Autism and Asperger Syndrome. *Journal of Developmental Disorders*, 34, 521-531.
- Maritn, R. A. (2007). The Psychology of Humor An Integrative Approach. 野村亮太・雨宮俊彦・丸野俊一監訳 ユーモア心理学ハンドブック. 北大路書房 137-231.
- 三橋真人(2010). アスペルガー症候群の人のユーモア理解のしづらさについて. 笑い学研究, 17, 108-114.
- Nomura, R. and Maruno, S. (2011). Constructing a Coactivation Model for Explaining Humor Elicitation. *Psychology*, 2, 5, 477-485.
- Reddy, V. Williams, E. and Vaughan, A. (2002). Sharing Humor and Laughter in autism and Down's Syndrome. *British Journal of Psychology*, 93, 219-242.

Samson, A.C. and Hegenloh, M.(2010). Stimulus Characteristics Affect Humor Processing in Individuals with Asperger Syndrome. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 40, 4, 438-447.

滝吉美知香・李熙馥・斎藤維斗・横田晋務・田中真理 (2010). ある発達障害児における他者の心的状態の理解に関する検討—「心の理論」における誤信念課題と実際の対人関係場面の比較から—. *教育ネットワークセンター年報*, 10, 75-84.

Van Bourgondien, M.E. and Mesibov, G.B. (1987). Humor in High-Functioning Autistic Adults. *Journal of Autism Developmental Disorders*, 17, 3, 417-424.

渡邊智之・佐藤早織・山本俊明・熊代永 (2010). 遷延化した不登校の背景に発達障害があった中学生の1例. *心身医学*, 50, 10, 961-968.

Werth, A., Perkins, M. and Boucher, J. (2001). 'Here's the weaver looming up' Verbal humour in a woman with high-functioning autism. *Autism*, 5, 2, 111-125.

Wing, L. (1996) THE AUTISTIC SPECTRUM: A guide for parents and professionals. Constable and Company Limited, London. 久保紘章・佐々木正美・清水康夫監訳 自閉症スペクトル 親と専門家のためのガイドブック. 東京書籍 28-71.

付記

本稿をまとめるにあたり、ご協力いただいたAさんならびにお母様に、心より深く御礼申し上げます。

なお本研究は教育ネットワークセンターコンサルテーション事業発達相談（事業代表者；田中真理）及び、科学研究費補助金（挑戦的萌芽研究／課題番号 22653075・研究代表者；田中真理）の助成を受けた。